

「主を信じるものの幸い」

民数記 13章 26節～33節
ルカによる福音書 1章 39節～45節

説教 朴志暎牧師（長居教会）

モーセに導かれたイスラエルの民は奴隷の生活をしてきたエジプトを出て、荒野の旅をし、シナイ山で十戒と呼ばれる神様の戒めを受けてパランの荒野に到着しました。そして、モーセはこれから行くカナンの土地へ偵察隊を12名送りしました。

40日間めぐったあと、偵察隊がモーセに報告します。その地は、とても素晴らしく、乳と蜜の流れる土地でした。大きな城壁で囲まれており、ネゲブ地方にはアマレク人、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人、海岸地方およびヨルダン沿岸地方にはカナン人が住んでいます。ノアの時代から戦いを好む巨人族ネフィリムもいます。約束の地は最高に素晴らしく、住んでいる人たちも立派でした。

ですが、その土地に住んでいる人たちに比べて自分たちはいながらのように小さなものに思え、私たちにはその場所はふさわしくないと思いました。彼らは劣等感を感じ、心理的にも委縮してしまい、指導者のモーセに不平や不満を言い始めました。

しかし偵察隊の中でカレブという人がいました。彼はイスラエルの民をしずめて言いました。「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」。(民数記13章30節)と宣言しました。

ヨシュアもそのように宣言しました。そして、このように言います。「ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食べ物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」。(14章9節)

しかし、イスラエルの人たちはカレブとヨシュアの言葉を信じようとしないで、不平を言い、夜通し泣きながらモーセとアロンを責め立てました。モーセではなく、神様に対して不信仰と

不平を言ったということです。その結果、彼らは40年間も荒野をさまよひ、ヨシュアとカレブを除いて一人もカナンの土地に入ることはできませんでした。

10名の偵察者は、客観的で現実的で正しい偵察をしました。彼らが言っていることも全て事実です。でも、彼らは目に見える現実だけを見て神様を見ていなかったのです。不足していたのは神様への絶対的な信頼でした。カレブとヨシュアは、神様を絶対的に信頼し、神様の御心を信じ切りました。

もう一人、新約聖書での人物マリヤの話を読みました。聖霊によってイエス・キリストを身ごもったマリヤは、自分の身に起きた出来事で、人から石打ちにされる命の危険を背負いながらも、ただ神を信じ、神様が願う通りになりますようにと自分のすべてを神様に委ねた女性です。それを見たエリザベツは宣言しています。「主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」。(ルカによる福音書1章45節)

私たちと神様の関係は一体どのようなものであるか、考えてみましょう。何もない荒野をさまよう時、大きな巨人と戦いをしなければならない時、どんな状況や条件の中でも本当に神様を信頼することができますように。神様のもとにとどまり、ただ神様を信頼し、期待し、最後まで従っていきたいと思います。

この世的な目で見れば私たちはいながらのような小さい存在であるかもしれませんが、けれども、私たちが信じている神様に信頼して、神様の絶対的な守りの中で歩いていきましょう。神様の御言葉を武器にして、私たちに与えられたそれぞれの戦いを戦って勝利していきたくて願います。

(記 朴志暎)